

2章 本州からの移住者の「お葬式」

当館には本州以南から移住してきた人々の葬式に関するモノはほとんど残されていません。個人が寄贈してくれた参列者の衣装や、寺に残されていた共用の葬列の道具がかるうじて残るのみです。

一方、葬式に伴う買い物や葬列、香典に関する記録や写真は多く残されています。亡くなった人をつつがなくあの世に送ることのみならず、残された人びとにとって必要な儀礼やつきあいを記録し引き継ぐことが重視されたため家に残りやすいことが影響していると考えられます。



葬列で使われた輿

葬列用の竜頭



葬儀で参列者が身に着けた長着(シロ)



中標津町の告別式の様子
(昭和38年1月23日撮影 中標津町郷土館蔵)



苫前町古丹別の葬儀の様子
(昭和27年5月 関三雄氏撮影)



新ひだか町静内(昭和15年頃撮影)

北海道のお葬式



当別町獅子内(昭和11年撮影)

はじめに

人の「死」は誰もが経験するものの、それに関わる「お葬式」の意義や順序、歴史についてはわからない人が多いのではないのでしょうか。

本展示会では、近代以降のお葬式が、アイヌと本州以南からの移住者それぞれによってどのように行われてきたか、博物館に残された資料をもとに紹介します。

アイヌの「お葬式」研究

これまでのアイヌの葬式を対象とする研究の大半は、和人の文化の影響を受けていない「伝統的」な姿を記録することを目的としてきました。そのため、「伝統的」な儀礼が盛んで、関係するモノが多く残されている地域に関してはそれなりの蓄積がある反面、早くから和人の影響が強く及んでいた地域でどのような葬式が行われていたのかといった点は、ほとんど調べられてきませんでした。また、「伝統的」な葬式の中にどのように和人の文化が取り入れられてきたのかといった視点も、十分ではありません。

今回の展示では、そうしたこれまで見逃されてきた「空白」や「混淆」の側面にも注意を向けたいと思います。



死者用の靴

移住者の「お葬式」研究

本州以南からの移住者の葬式を対象とする研究分野(ここでは主に民俗学)では、調査時点で知ることの出来る儀礼から、より古い形式を明らかにすることが目的とされてきた時期があります。そのため、人の死に関してどのような儀礼があり、それらにどのような意味があるのかが注目されてきました。近年では、葬儀社との関わりなど、現状が過去とどのようにつながっているのかに着目した研究も進められています。一方で、アイヌの葬式を対象とした研究に比べ、葬式に関するモノの比較研究はあまり行われてきませんでした。

今回の展示では、その理由についても考えてみます。

北海道という同じ地域に暮らし、「死」という同じ経験をする人びとを対象としても、それぞれが生きた時代や重視する観念、そしてそれを見る人／集める人の視点、考え方によって、集められるモノやコトそれに関する人の情報量は異なります。博物館に残されているアイヌと移住者それぞれのお葬式のモノやコトから、共通すること／異なることを考えてみましょう。

1章 アイヌの「お葬式」

当館にはアイヌの葬式にまつわる膨大なモノが収蔵されています。死者にまわせる脚絆や手甲などの死装束、死者に持たせるカバン、遺体を包んだゴザを縛ったり、墓標を飾り付けたりするための紐、遺族が喪に服すあいだかぶった特別な頭巾など、一つひとつのモノをじっくりと見てみましょう。

あわせて、葬式のために用意されていたはずのこれらのモノが、なぜ使用されことなく博物館に収められることになったのかも考えてみましょう。



新ひだか町の女性から寄贈されたお葬式用の道具



墓標の
装飾用の紐

主に遺体を
包んだゴザを
縛るための紐



儀礼の際に女性が身につける装身具であり、宝物でもあった首飾り。
死者とともに埋葬されることもあった。



古くは男女ともに日常生活の中で身につけた耳飾り。
性別・年齢の区別なく、死者と共に埋葬された。